

---

# 竜と書いてドラゴンと呼ぶ！ 短編

zens

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

竜と書いてドラゴンと呼ぶ！短編

### 【Nコード】

N5963F

### 【作者名】

zens

### 【あらすじ】

高校に入学したある少年はある日、ある竜と出会う。雨月先生の許可を頂いて短編を書かさせてもらいました。

## プロローグ：祭りに誘われた日

「輝さん、これを見てください」

「どうした？」

きっかけは、葵の持ってきた1枚の紙切れだった。普段であれば、簡単に読み流してしまう代物。

しかし、今日は違った。

「読み流さないで、きちんと見てください」

「ぐおっ………目が………」

紙を押し付けられ、目に葵の指が入ったような気がしたが、たぶん気のせいだ。

俺は涙目になりながら、葵から多少くしゃくしゃになった紙を受け取った。

「お祭り？ ああ、近所の神社の境内でやるやつか」

「はい」

葵はただ一言言ったただけだったが、それだけで俺は彼女の意図が読めてしまった。

「……葵はお祭りに行きたいんだな？」

じっと期待の眼差しを向けられれば、よほどの鈍感でもない限り気づくだろう。

尤も気づかなければ、葵がはっきりと言うと思うけど。

「連れて行ってくださるんですか？」

「特に用事もないし、いいよ」

俺がそう言つと、葵は飛び上がった喜ぶ。

そして、部屋の扉を開けてそこにいた2人に言った。

「輝さんが連れて行ってくださるそうですよ！」

「へ？」

すると、扉の向こうに待機していたと思われる加奈と碧さんが部屋に飛び込んできた。

「輝、私色々と食べてみたいものがあるんだけどいい？」

「輝君は、どんな浴衣が好みかしら？」

「・・・ごめん、1人ずつ喋ってくれない？」

かつて、聖徳太子は10人の話を一遍に聞いて、その上、会話を成立させたという。

しかし、俺はというと2人に話しかけられて満足に返答すら出せない。

その聖徳太子の話は、実際嘘であるというが、それだけ優秀だったということであろう。

そもそも彼が実際にそのようなことができたとは限らないわけで、第一俺のこの状況とは何も関係ないような気がする。きつと、彼もまた同じように困るのだろうから。

そのような事を3人そっちのけで考えていたことが災いしたのかも  
しれない。

すっと現れた影に気づいた時にはもう遅かったのだ。

見上げた先には、おばさんの無表情な顔があるだけだった。

それを見るだけで不幸にも俺は、その後を起こるであろうことがあ  
つさりと読むことができてしまった。

「話を聞いていない輝にも分かるように簡単に言うと、お前は先に  
行って3人を待ってろってことだ！」

そして、そのまま俺はおばさんから文字通り家から蹴り出されてし  
まったのだった。

・・・背中が痛い。

仕方がないので、俺は背中をさすりつつ先に1人で神社に向かうこ  
とにした。

しかし、その途中、ふと大事なことを思い出してしまった。

そういえば、3人は神社の場所を知っているのだろうか？

・・・。

・・・。

向こうから持ってきた話だから、分かるよね。

チラシも持っているんだから。

そのように楽観的に考えても、不安の種は尽きなかった。

## 1話・竜に浴衣

遅いな。

俺は、境内へと続く階段の前で1人悶々と時間を過ごしていた。

あれから2時間。

時計の針は、6時を指し示そうとしている。

やっぱり3人を連れてくるべきだったと今更後悔するも後の祭りだ。

そんな時だった。

「輝さん、お待たせしました」

ようやく来たか。

幾分ほっとしてその声に振り向くと、そこには浴衣姿の3人が並んで立っていた。

どうやら俺の心配は杞憂に終わったらしい。

「遅かったな、道に迷ったのかと思って心配したじゃないか」

しかし、俺の安堵感とは裏腹に、葵たちはバツが悪そうだ。

その表情を見るに、俺の心配はあながち間違っていなかったのでは？と勘繰ってしまう。

先程から何か3人で視線を合わせつつ、誰が言おうかと相談しているような雰囲気。

え？ まさか？ ……まさかね。

そして、その不安は現実となった。

「……輝、実はね……私たち道に迷ったのよ。葵が地図を逆さまに見ていたから、よく分からないところに出ちゃって」

……家の前で待つておけばよかった。

加奈の申し訳なさそな顔を見て、俺も後悔した。

それから5分後。

俺は新たな危機に見舞われていた。  
それは、碧さんの言葉が発端だった。

「ところで、輝君。私たちの浴衣姿どう思います？」

きっと重すぎるこの場をなんとかしようと言った言葉だったに違いない。

うん、そうだ、絶対に。

笑っていたように見えたけど、きっと見間違えか何かなんだ。

俺は当然のように、褒めてみた。

「3人とも浴衣がよく似合うよ。やっぱり祭りには浴衣だよな」

葵は、濃い藍色を基調とした大人しめの浴衣を着ている。普段よりも大人っぽさが溢れているように思える。

でも、何故に靴？ そこだけが非常に残念だった。

加奈は、白を基調とした赤や青、黄色の花柄をあしらった可愛らしさを引き立たせる浴衣だった。

こちらは、下駄も履いているし、くるりと回った時に見えたうちわもその浴衣に合っていた。

そして、碧さんは奇をてらいたいのか真っ赤だ。何事かあったのかかと思いたいくらいに真っ赤だった。一応、白で花の模様があてがわれているけど、もうそんなの関係ないくらいに紅い。

あと、……目の保養になる……じゃなくて、浴衣が肌蹴てますよ。

ここまでではよかったのだ。3人とも喜んでくれたから。

しかし……。

「じゃあ、この中で誰が1番似合っていると思う？」

「へ？」

碧さんのこの言葉で状況は一変してしまった。

さっきまでしおらしくった葵や加奈の姿は跡形もない。  
今はただ、私よね？ という視線を送ってきている。

俺はと言うと……。

「え、えーと……3人ともそれぞれ可愛いから決めるのは難し・  
……いかな？」

もうシドロモドロなわけで。

しかし、彼女たちがそれを許してくれるはずもなく。

せめて圧力をかけないでくれと言いたいが、きっと圧力だと感じて  
いるのは俺だけなんだろう。

そこにいるのはあくまで、『普段通りの』彼女たちなのだから。

「輝さん、どうして決めることができないんですか？」

「輝、素直に言っていていいよ。私、怒らないから」

「輝君、優しさは時として残酷なものよ。だから、はっきりと言つてほしいですねえ」

その上、周りからの視線もきついような気がする。

理由は分かるけど、何か不条理さを感じずにはいられない。

ただ、それは当然の報いなのかもしれない。

傍から見れば、1人の男が3人も女性を連れている。

そして、はっきりとしない男にいらつくのは当然の摂理というもの。

「・・・」

俺はどうか角の立たないような結論を求め、脳をフル回転させてみるものの何1つ妙案が浮かんでこない。

その結論が出ない時間に比例して、3人の機嫌もどんどん悪くなつていく。

初めこそ期待の眼差しを送っていた3人も、やがて早く決めてよという風から、今となつては失望さえその目に浮かんでいるようだ。

・・・かなりまずい。

ここで何も言わなければ3人は失望するだろうし、家に帰ってからもきつとまずいことは目に見えている。

素直に言うべきだよな？

俺は意を決すると、3人に向かって言った。

「加奈が1番似合っているかな・・・」

当然、選ばれなかった2人の厳しい視線が俺に注がれる。

加奈だけは、これ以上ないくらいの笑顔を俺と2人に向けていた。その向けられた笑顔に葵と碧さんの顔が引き攣ったのは言うまでもない。

「えへへ、1時間以上かかったけど、頑張ってみてよかった」

「本当によく似合ってるよ。浴衣で可愛らしさが引き立っていると思う」

加奈が嬉しそうにするものだから俺も何だか嬉しくなる。

しかし、1人を鼻履してしまえば後の2人は立つ瀬が無くなってしまふ。

「輝さん、加奈だけ褒めるつもりですか？」

「折角、輝君のために浴衣を着てきたのに、何か一言くらいあってもいいと思いますよ」

「2人とも加奈に引けを取らないくらいに似合ってるって。でも、ちよっとだけね・・・」

俺が言葉を濁すと葵はずいとその身を俺に寄せて話の続きを迫った。

「はっきりとしてください、輝さん。私に足りないものは何ですか？」

そして、葵に追隨するように碧さんもずいと体を俺に寄せた。

「加奈さんにだけ鼻唄するというのは教員として許せませんね。理由を教えてくださいわねえ」

傍から見ると両手に花。

きつと誰もが1度は憧れるシチュエーション。

でも、決して楽ではない、茨の道がそこにはあった。

俺を挟んで威圧し合うのはやめてくれないか？

「それに・・・」

「それに？」

2人の言葉もどこかしらきつい印象を受ける。

気のせいだと内心何度も唱えながら、俺は3人を交互に見つつ言った。

「浴衣は日本人女性は慎ましい体系にこそ似合うものだと思っ  
んだ。胸が大きいとどうしても着崩れするし・・・」

それは、単に家にあるもののサイズが合わないだけだとも言っ

実際、葵と碧さんの浴衣は胸の辺りがきつそうだったりするから。

ただ、この俺の言葉には重大な欠点があった。

「え？ じゃ・・・じゃあ、私に似合っって言うてくれたものも・・・  
私に胸がないから」

「あ……」

しまったと思うにはあまりお粗末。

覆水は盆に戻らないように1度言った言葉は取り消せない。

俺は、慌てて自分の保身に走った。

「3人とも竜なんだし、いいじゃないか。そんなに浴衣を着こなす竜なんて俺は見たことないよ」

そもそも浴衣を着る竜を見たことがないのは、この際どうでもいいことなんだ。

しかし、俺は保身に走ったところでこうなることはどこかで予想できていたような気がする。

「そうですよね、私なんてただの竜ですもんね」

「何よ。輝は私がこんなに一生懸命なのに……そんな一言で片づけるなんて……」

「そんな風に輝君は私を見ていたのね。……残念ねえ」

と、彼女たちはすっかり機嫌を損ねてしまったようだ。

折角のお祭りだというのにこれじゃあ楽しくもない。

何とかして機嫌を直してもらわなくては。

それから俺は思いつく限り、あの手この手を試してみた。

結局、3人の機嫌を直ったのは15分ほど経った後で、その理由はあまりに俺が情けない、惨めに思えたというものだった。

## 2話：彼女はエビが好き

「あつ、あれ、面白そう。輝、あれやろうよ」

「そんなに引つ張らなくても、屋台は逃げないよ」

境内に入ってから彼此10分。

加奈は、すっかりお祭りの雰囲気飲み込まれ、上気した顔をしてせわしなくあちらこちらを向いていた。

「輝さん、この飴は何て言うんです？」

「それは、リンゴ飴。見た目が果物のリンゴに似ているからそう言うんだ」

「輝君は、どの辺りから回ろうと考えているのー？」

「そうですね、とりあえず歩きながら面白そうな物を手当たり次第見ていけばいいんじゃないかな？ それに・・・」

一旦言葉を区切って俺は、ふと加奈の方を見やる。

「どうかしたの？ ああ、そういうことですかあ」

どうやら碧さんも加奈と葵の様子を見て納得したようだ。

2人は、物珍しいのかやたらときよろきよろと辺りを見回しては、好奇心に満ちた目をしている。

きつと、俺が行きたい場所を聞かなくても向こうからやってくるに違いない。

そう思っていると……。

「輝さん、これやりたいです」

と、葵さんが少し先の露店の前で手を振っていた。

不思議なことにそこだけは人があまりおらず、葵さんは周りの人からも少しだけ不思議そうな目を向けられていた。

「はいはい、今行くよ」

俺は、葵に聞こえるように大きく手を振りながら叫んだ。

葵の立つ場所に着くと、そこには……。

「へい、らっしやい。しかし、兄ちゃん。女3人も連れてくるなんてやるねえ」

「ははは……」

露天商のおじさんが1人座っていた。

その前には、生け簀が1つ。

それは、ただのよくある祭りの風景に過ぎない。過ぎないのだけど……。

「輝さん、私、これがやってみたいです」

「・・・」

その生け簾の中身が問題だった。

「ザリガニですよ。輝さん、いいですよね？」

どうして、ザリガニなんだ？

お祭りなら、金魚とかひよこことかそう言ったものを売っているはずなのに。

すると、おじさんは俺の思考が分かったのか疑問に聞いてもいないのに答えてくれた。

「いやいや、ほんとはおっさんも金魚とか売りたいのよ。でも、お金なくてさあ、田舎の川で盗って来たのよ。でも、ザリガニなんて売っても誰も止まってくれないし、見てくれないんだ。いやあ、でもお客さんが来てくれてよかった、よかった。ささ、じゃんじゃん釣ってくれ」

そりゃ誰も止まらないでしょ。

「次は、ザリガニがペットブームになるとおっさんは予想しているのさ」

「絶対ないって。うん、どう考えても無理だよ」

臭いもきついし、共食いをしたりして買うのに大変だからだ。

大体、見てくれが可愛くないし、放っておけば翌日には全滅する。

エビだったら食べられるのに・・・。

何気なしにザリガニを見ながらそう思うと、一瞬別の強力な意識が入り込んで来た。

おいしそう・・・。

俺は、はっと我に返ってまず、加奈を見る。

「何？」

違う。

次は、碧さん。

「ああ、どうしたの？何か私の顔についてる？」

違う。

おじさんは、違うとして、葵は・・・。

「・・・ふえーん、全然釣れませんよ」

「・・・」

どう見ても、あの凄まじい執念の持ち主は葵のようだ。

既に、1回100円で餌と釣り具を借りており、水辺に釣り糸を垂らしていた。

しかし、全く釣れないようだ。

と言うより、葵の垂らす餌からザリガニが、どんどん離れていつて  
いる。

おじさんも驚愕の表情を浮かべているけど、俺もまた驚きを隠せな  
かった。

生物は、本能で身の危険を察するのは本当らしい。

でも、これだと葵が可哀想なのも事実だった。

「葵、ちょっと貸してくれる」

「うつつ……輝さん。お願いします」

「仇はしっかり討つからな」

こうして、俺はザリガニとの戦いにカマボコ1本で挑むのだった。

「輝さん、すごいです。たった5分で15匹だなって」

「ふーん、輝って変な才能があるんだね」

「よかつたわねえ、葵さん」

結果から言つと、俺にしては珍しく物事を成し遂げることができたのだ。

しかも、結果は良好。葵は、とても喜んでくれたのだ。

しかし……。

「おじさん、このザリガニ、リリースしていい？」

俺にとっては無用の長物に過ぎない。

そもそも育てるの面倒だし。

当然、その言葉に真っ先に反応したのは葵だった。

「えっ！？ こ、これ返してしまうんですか？」

「だって、育てられないでしょ？ それなら、ここで返してあげるのが筋だと思うんだ」

尤もらしいことを言っているが、単に持って帰りたくないだけとも言つ。

すると、葵に加勢するようにおじさんが話に加わって来た。

「ちょっと待つてくれ兄ちゃん。最近多いんだよね、そういう人。世話をするのが嫌だから持つて帰らないってのが。だけど、命の大切さを学ぶにはいい機会だと思わないか？」

「いえ、全く。第一、おじさんの店、人来てないから分らないでしょ。それに、ザリガニなんて好き好んで持つて帰る人なんていないよ」

押し売りには断固とした態度を示さなければならぬ。

それでも、おじさんは、なかなか折れようとはしない。

「実は、お祭りが終わると、このザリガニ全部捨てちまうんだ。維持費がかかる前につてことなんだが。だから、できれば1日でも長く生かしてほしいんだ」

なかなかしつこい。

でも、俺も折れるわけにはいかない。

「川に返せばいいんじゃないか？」

こんなもの持つて帰りでもしたら、おばさんに何言われるか分からないし。

冷たく言い返したこの一言が効いたのか、おじさんはそれ以上言わない。

勝った、俺はそう思った。

が、世の中そう甘くはない。  
おじさんは、所詮中ボス程度の存在に過ぎなかった。

「な、なんて可哀そうに……。分かりました、このザリガニ全部、私がつけて帰ります」

「ちよつ!?!」

突然の葵の宣言に俺の目玉が飛び出しそうになり、慌てて目玉を抑える。

と、一人でポケットコミをしている間に、おじさんは俺の釣ったザリガニをいそいそと箱に入れ始めていた。

「おおつ、最近の女の子は遅しいね。いよつ、女神様。だが、まだこつちも商売があるんで、とりあえず釣ったもんだけ持って帰ってくれ」

「はい」

そして、葵にその箱を差し出して、

「きちんと育ててくれよ」

と、おじさんは、責任放棄も甚だしいことを言った。

葵も、

「はい、明日の食事にします」

子供のよつに元気よく返事をした。

しかし、その言葉のせいでおじさんは硬直していた。

葵はよもや自分のせいとは思っていないようで、きよんとしておじさんの様子を窺っていた。

しばらく経っておじさんは、

「へ？ はははっ、お譲ちゃん、冗談も上手だね」

と、どうにか言葉を絞り出した。

「いいえ、本当に食べるんですよ。結構おいしいんですから」

あっさり葵に一蹴されてしまい、今度こそ本当に止めを刺されてしまったようだ。

嬉しそうにザリガニの入った箱を受取り、今日一番の笑顔を見せる葵におじさんも俺も開いた口が塞がらない。

「・・・」

俺も食べなきゃいけないのだろうかと思うと、憂鬱にならざるをなかつた。

### 3話…たまにはこういっ話もあり

時間が経つにつれて近所の人たちがぞくぞくとやって来ているのだろつ。

神社の境内は、すっかり人で混み合っていた。

人が多くなると、それだけで騒がしくなるけど、今、最も騒がしいのは、たぶん俺達なんだろうな。

「……ああつ、もうっ!!！」

イライラする加奈を見るのは、何度めのことが。本当に地面を踏みつける、地団駄を踏む人がいるとは思ひもしなかった。

「……いい加減諦めたら？」

「雷落とすよ？」

「ごめんなさい」

俺は怖くて注意できない。

また、爺さんに会うのはごめんだ。

「葵、何か言っちゃってくれ」

「明日の朝食は、味噌汁と……」

もう話を聞いてさえいない。どこか違う世界に入り込んでしまったらしい。

それなら……。

「碧さん、加奈に何か言っておあげてください」

「あひ？ いば、ばべべぶの」

何言っているのか分かりません。

あと、焼き鳥の串は食べ物じゃないんだけど……。

女性陣は今日も自由奔放です。

とても、俺の手に負えませんです、はい。

このように今、俺達4人は射的を楽しんでいる？ わけだ。

これは、加奈がどうしてもやりたいたうので寄ってみたんだ。  
100円で3回という良心的価格でなければ、5度もやらせていない。  
い。

その分、商品も大したものはないけど。

しかし、結果はこのざま。

加奈は、むすつとして鉄砲を撃ち続けているし、周りのお客さんも初めこそ面白がっていた節があったものの、今では可哀想、あるいは俺にどうにかしろ、あるいはもう何か商品をあげたら？ といった視線へと変わりつつあった。

「はあ……後2発しかないよ。何で当たらないの？」

その前に13発無駄玉があることを忘れないでほしい。

「加奈、貸してみて」

「いや。絶対、当てて見せるんだから……あっ!？」

俺から鉄砲を守ろうとした弾みで、さらにもう1発無駄玉を撃ってしまったようだ。

そして、その弾みで尻もちをついてしまっていた。

呆然とする加奈の顔には落胆と俺への非難が込められている。

「……」

何がそこまで加奈を駆り立ててるのか？

俺もやってみたら分かるかもしれない。

そこで俺も、店主のおじさんに100円を渡す。

「……すみません。俺も1回お願いします」

そして、呆れた様子の店主から鉄砲と弾を受け取ると、

「加奈、よく見てろ。こうやって打つんだ」

そう言っつて俺は、適当な的を狙って引き金を引いた。

小気味のいい音と共に、小さな置き人形が弾に弾き飛ばされる。

「あっ……」

隣で訝しげに俺の様子を窺っていた加奈の様子が初めて変わったのが分かった。

俺は、それをチャンスと見るや、間髪入れずに話しかける。

「少しは俺の話を聞いてくれる気になったか？」

「っ……。」

加奈は、悔しそうに残り1発となった弾を見つめていた。

しかし、やがて諦めたような、そこはかとなく悔しそうなお顔で唇を尖らせると、多少棘のある口調で言った。

「……ふん、分かったわよ。聞くから……その……ちゃん  
と教えてよね」

「はいはい、素直じゃないな。それじゃ、まずは構え方かな」

俺は、加奈の隣に立つとその鉄砲を店のカウンターの上に置いた。

加奈は、不思議そうに見ていたが、俺の真似をして同じようにその鉄砲を机に置く。

それまでの加奈は、ただ棒立ちのまま、しかも自らのから遠くなるように1、2歩下がって撃っていたのだ。

「やっぱり、机に置いた方が安定すると思うぞ。加奈は、小柄で少し力が足りないみたいだし」

俺が持つても少し重いと感じるくらいだ。女の子である加奈には、もっと重く思えるだろうな。

何で、こんな鉄砲をお祭りに使っているのか、俺にはよく分からない。客層を考えれば、もう少し軽い方がいいと思う。

「うん。それで？ この後は、もう撃つていいの？」

「気が急くのは分かるけど、まだだ。次は、欲しい物を見つけるんだ」

「それじゃあ・・・私は、あれがいいな」

しばらく考えた末に加奈が指さしたのは、猫の小さなマスコット人形だった。

「そうか。それなら、その少し下を狙って撃つといいよ。加奈は、撃った時に少し銃口が上に向くみたいだから」

俺もそこまで詳しくないので、これくらいしかアドバイスはできない。

「やってみる・・・今度こそ当てるんだから」

非常に気負っていることが、唯一の心配だが、俺がここで声をかけて集中を切らすのもよくないと思い、そのまま見送った。

加奈は、俺に言われたとおりに構えるとじっと一点、彼女の狙う目標だけを見定める。

周りでは、数人の子供が撃っているが、それを気にする様子もなくその目は真っ直ぐだった。

引き金に左手を当て、銃身を固定するように右手をそえる。

そして、二度ほど深呼吸をすると、その引き金を引いた。

それは、刹那にも永遠にも感じられるような不思議な時間だった。

加奈の撃った弾は、綺麗なラインを描いて目標へ向かって飛んで行く。

しかし……。

「輝、ごめんなさい。私、当てられなかった」

結果として、加奈の弾は目的の物に当たるとはなかった。残念なことにその下の台に当たってしまったのだ。

加奈は、いつもに増して小さく見え、目にはうっすらと涙が浮かんでいるようだった。

何だかんだ言っても、責任を感じているのだろう。

でも、俺はそんな加奈の姿をいつまでも見ていたくはなかった。やっぱり、加奈は笑っているのが1番なのだから。

「それじゃ、最後に一発ずつ撃とうか」

「でも、それは輝の……」

当然のように加奈は受け取ろうとはしなかったが、それは既に織り込み済みのことだ。

「さっき俺が邪魔した分を返す。これならいいだろ」

俺は、加奈の手に弾を握らせるとそのまま横に並んで鉄砲を構える。

加奈は、少しだけ迷っていたようだが、その弾を鉄砲に入れて俺の

横に並んで構えた。

「輝……。せー、の、で撃とう、ね？」

「分かった。それじゃ、俺が言うか」

黙って加奈が頷いたのを確認すると、俺は多少恥ずかしくもあったがこれも加奈のためだ。

1つ呼吸をして、俺も気持ちを整える。

「加奈、準備はいいな。せー、のっ」

パンツ。

乾いた音がほぼ同時にその場に響いた。

「まだ花火まで時間もあるし、もう少し屋台を回ってみるか」

射的で時間を結構使ってしまったとはいえ、まだまだ時間に余裕があることを知った俺は、3人にそう提案した。

3人もまた、特に異論はないようで、行きましようと言った葵が言つと碧さんと先に歩き出した。

俺もそれに続いて歩き出す。

「……輝」

「何……？」

声が出た方に振り向こうとすると、頬に軽く触れるくらいのキス。

「……ありがとう」

そして、微かに聞こえた感謝の言葉。

俺が慌てて加奈の方を向くと、加奈は既にそっぽを向いてこちらの方を見ようとしなかった。

その代わりに、そこはかたなくむすつとした葵と碧さんがこちらを向いた。

「輝さん、どういうことですか？」

「あらあ？ きちんと説明が欲しいわねえ」

「……えっ？ いや、その……これは……」

俺は状況を整理できておらず、2人が血相を変えて詰め寄って来てもおろおろとするばかりだ。

「葵も碧さんも、何もしてくれなかったじゃないか」

「……と、こつ言えたら苦勞はないか。」

触らぬ神に祟りなしと言うが、竜も同じことが言える気がする。竜を神として称える所はあると聞くのだから。

「……あの、全部口に出ていますよ？」

「あまりに間抜けすぎて怒る気も失せてしまったわあ」

「ははははっ……はあ……」

可哀想なものを見るような目で俺を見ないでくれ。

「だって、可哀想です」

「そうよねえ、かわいそうね」

鬼だ。竜じゃない、この2人、鬼だ！！

しかし、鬼と竜、どっちが強いのだろうか？

案外、この状況にも慣れてしまったようで、頭の中には別なことが浮かんでくる。

人って、本当にすごいね。

そんな時だった。

「3人とも、早く行くよっ！」

結局、1人だけ先に行ってしまった加奈が、大声で俺たちを呼んでいる。

「今行くから、そこで待ってる。加奈も待ってるし行くか」

「はい」

「ええ」

俺と加奈は、当てることができたかどうか。  
それはどうでもいいことだ。

加奈があの結果に満足していればそれでいい。

ただ、残念なことに俺だけは、綺麗に終わることはできなかったよ  
うだ。

『おまけ』（適當）

もしも、輝が的を外していたら

「うわっ、あれだけ大口叩いてこれなの？」

「・・・この野郎、見てろ」

俺は、加奈の言葉にかちんと来てしまった。

「私、野郎じゃないんだけど・・・」

加奈が何か言っていた気がするが、そんなことはどうでもいい。  
喧嘩を売られてしまった以上、買うしかない。

「それなら、俺と加奈、どちらが先に当てるか勝負だ」

「望むところよ。輝になんて負けないんだから」

こうして、俺と加奈の対決の幕が上がった。

「・・・2人とも、白熱するのはいいですけどほどほどにしておいてほしかったですね」

「「ごめんなさい」「

結局、俺たちは1000円ほど浪費してようやく同時に当てる事ができた。

しかし、その間放りっぱなしだった葵と碧さんはえらくご立腹で、反論できる立場でない俺と加奈は揃って小さくなっていた。

「輝のせいなんだからね」

「俺のせいなのか!？」

「輝さん、反省の姿勢が見られませんよ」

・・・どうして、俺だけが怒られているんだ？

加奈は、俺の様子を見てこっそり笑っている。

こんなことなら心配しなければよかった。俺は、心の底から後悔した。

#### 4話・当たるも八卦、当たらぬも八卦

「はい、これも持ってきてくれる?」

「はい? これも? 碧さん、一体あとどれだけ食べる気ですか?」

俺は、手が塞がっている。

それは、単に碧さんが色々と食べたがったせいだ。

焼き鳥、お好み焼き、焼きそばに始まり、たこ焼き、たい焼き、回転焼き、焼きトウモロコシ、焼きイモ・・・と挙げればきりが無い。考えるだけで胸やけがする。

「あらあ、あれもおいしそう」

「ねえ、せめて輝が持つてるの食べてからにしたら?」

碧さんが、新しい物に目移りしたところで、加奈が助け船を出してくれる。

葵も同じように、うんうんとうんざりしたように頷く。

2人もまた碧さんの被害者であった。

さつきから2人も俺の荷物を減らそうと食べてくれていたからな。俺はと言つと両手が塞がっているので食べることはできないのだ。

「そうねえ、少し食べてからにした方がいわね」

よじやく自重する気になってくれたようで俺は一安心だ。  
しかし……。

「輝君、はい、あーん」

「何故に!?!」

自分の思う道を行くのが、碧さんだ。

俗に言う天然と言うのだが、時にそれは周りの人間に害を与えることとなる。

主な弊害は、周りの人々の痛い視線、突飛過ぎて誰も付いていけない独走性、相手をしないと機嫌を損ねる天然さんである。

「もう少し周りの迷惑を考えませんか?」

「はい、あーん」

甘ったるい声を出して、俺にたこ焼きを突き出す碧さんの可愛らしさは天使のようだ。

俺だって、甘受できればどんなに幸せなことが。

しかし、現実には甘くはないということ俺は身をもって知っている。

「輝さん」

葵の声が聞こえ、助けしてくれるのかと思いきちらを向くと、

「むじっ!?!」

その瞬間に、爺さんの動きにも匹敵するくらいの速さで、葵が何かを俺の口に入れてきたのだ。

何とかそれを飲み込むことは出来たが、危つく喉に詰まらせるところだった。

ただでさえここ最近、色んなものが喉に詰まる事が多いのだから冗

談でもやめてほしい。

モチとかコンニャクゼリーとか。

後で、葵さんにはよく言い聞かせよう。

「輝くん……、食べてくれないの？」

「……あー、はいはい食べます。食べますから拗ねないでください」

おかげで、碧さんが拗ねてしまったじゃないか。

半ば俺のせいだろうけど。

「……」

後ろの方でぼそつと全部と聞こえたのは気のせいだと思う。

「では、いただきます」

しかし、

「ふふっ、残念でした」

俺が食べさせてもらえる予定だった物は、見事碧さんの口の中へと消えていってしまったのだった。

「始めからくれる気ありませんでしたよね？」

「さあ？ 晃君、忙しそうだったから」

無理やりとぼける碧さんだったが、俺からすれば相当に無理がある。しばらくじっと俺が、碧さんを見ていると、やがて逃げ切れないと観念したのか、

「では、もう1度。あーん・・・」

と、今度は焼きそばを割り箸で俺に突き出してきた。今度こそはくれるんだよな？

俺は、多少疑いつつもその箸に口を近づけた。

もう少しで・・・。

そう思った時だった。

すっと目の前から焼きそばがロストした。

気づいた時には、碧さんの口の中へとそれはあり、ほへ？ と碧さんは悪戯っぽく笑っていた。

俺は、この時、再び騙されたことに気が付いたのだった。

「碧さん！ 2度も騙すなんて人としてどうかしてます！」

「私、竜だからねえ」

俺の文句など聞く耳持たぬと彼女は両耳を両手で塞いでいた。都合のいい時だけ、竜ですか。

「輝さん、泥沼ですね。・・・でも、楽しそう」

「そう？ 私からすれば泥被り過ぎてやけくそになったようにしか見えないけど」

「そして、いずれその泥塗れになって臭いがついてしまうわけです」  
「葵。意味がよく分からない」

「そうなんつても泥抜きをするとすると思います。綺麗な水なら2、3日で大丈夫です。ザリガニだってそうです」

「それってさ、当てつけ？」

「さあ、どうでしょう？」

何か、あつちはあつちで何かよく分からない話をしているし。

「その気がないなら初めからやらないでください」

「ん〜、もう1回やってみる？」

「・・・もう結構です」

俺は、碧さんに文句を言いつつ本堂の方へと向かいつつ歩いていると、いきなり真横から声をかけられた。

「もし、そのあなた方」

「もしかし……なくても俺達のことだよな」

そもそも神社の本堂の周りにはあまり人はいないし、その女性は俺たちの方を向いている。

実は、後ろの人に話しかけていた……なんてこともない。それは、とても恥ずかしいことだと聞いたことがある。

「はい、そうです。3人の女性に囲まれているそのヘタレな殿方。安心くださいな、背後霊などおりませんから」

後ろを向いた事をどうやら勘違いされたようだ。

しかし、その女性はそのことにさらに触れることはなく、話を続ける。

「よろしければ、おみくじはいかがですか？」

失言などしていませんよ、おほほと言わんばかりのしれっと表情に俺は少しむっときてしまい言い返した。

「ヘタレは余計だ、ヘタレは。何で初対面の相手からそんなこと言われなきゃならないんだ!？」

しかし、周りによく分かっているようだ。

「輝さん、それは正しいことですよ」

「まさか、ヘタレじゃないと思ってた？」

「あらあゝ、もうボケちゃったの〜? ……可哀想ねえ」

こんな時だけ本当に気が合うんだなと、少しばかり憎らしく思える。

ただ、こればかりは気にしてもしようがない。  
俺は、3人の事を少しばかり忘れて目の前の巫女さんに集中する。

意外と見た目は可愛いし、胸も大きいのかその巫女服を形よく押し  
上げている。

そんなことを思っていると、背後から鋭い視線を3対も感じた。

「・・・輝さん、少しばかり頭を冷やしませんか？」

「葵、奇遇だね。私も雷で輝を冷やしてあげようかなって思ってた  
とこ」

「あらまあ・・・あまり感心しないわあ」

そのせいで、浮ついた気分は一瞬で消え去ってしまった。

巫女さんだけは、分かっているように俺達が仲がいいと思ったの  
かふふつと親子でも見るような目で笑っていた。

「ところで・・・あなたは巫女さん？」

「はい。わたくし、この神社の巫女をやっております」

「ああ、お守り売ったり、神事のための神具を作ったり、賽銭を集  
めたり、神社を掃除したり、そのくせ収入なくて大変だったりする  
・・・」

「あの・・・とてつもなく勘違いをされているようですが、わたく  
しは職員です。一応正式にここで働いております。・・・確かにき  
つい割には薄給ですけど」

最後のはたぶん本音なんだろうな。

「ところで、ここはどんな神様を祀っているんですか？」

「こちらの神は犬神様にございます。龍神様も同時に祀ってありますが、お願い事を叶えてくださるのは犬神様の方です。ですから、本堂には犬神様を祀っています」

とりあえず、これ以上竜に会うことはなさそうだ。

何となくだが、ほっとした。これ以上増えても俺の苦労が増えるだけのようない気がするから。

「こちらにあるのが、霊玉×8です。これが願いを叶えてくれます」  
「願いを叶えたら四散するんじゃない・・・」

しかし、俺の心配は杞憂のものだとすぐに知ることになる。

「いえ、その心配は御無用。何かの漫画の読み過ぎではありませんか？ 同じ運命の下に人が勝手に集うように玉もまた勝手に集うのです」

さりげなく俺の事を馬鹿にするあたり、この巫女は性格が悪いのだろうな。

「あなたが汚染されていると思います。・・・ところで、おみくじを言いましたけど、具体的に何を占ってくれますか？」

占いなど所詮は占い。

俺は、そんなことは信じないが、一応の好意を無駄にするのもよくないと思ったのだ。

すると、巫女さんは考えていたことをそのまま言っが如く喋り出した。

「恋愛から、今・・・うんっ、明日のおかずまで何でも占います。見たところ、あなた方がカップルのようですね」

そして、そう言って、碧さんと俺の事を指す。

唐突な事に俺は思考が固まって、口を酸素の足りない水槽にいる金魚のようにパクパク動かすだけだった。

しかし、女性陣は俺とは全く正反対だった。

「えっ！？ それは違っ・・・」

「それだけはありません・・・」

「そうなんですよ。分かる人には分かるんですねえ」

葵と加奈の抗議の声をかき消すかのように大声で、碧さんは俺の腕を取って自身の腕を絡めるとそう言った。

「やっぱりそうでしたか。巫女の目に狂いはありません。では、お二人はこちらにどうぞ」

思いつきり狂ってるんだけどな。

最早、俺が何をしても仕方無い状況が出来上がっていた。それに、碧さんは案外わくわくとして、先に座っており、俺を手招きしているのだから。

「まずは、定番の相性を占ってみましょう」

「……」

彼女は、無言で六角柱の筒をしゃしゃかと振り始める。

あれ？ さっきまでずっと玉のことを強調していたのに。

俺の疑問を他所に彼女は、玉を使う気配もなく、それは木の机の上に無造作に転がっていた。

「はい。出ました！」

彼女は、3本の棒を握りしめてそう言った。

俺は、その姿を見て、思った事を言わずにはいられなかった。

「玉関係ないのか!？」

「はい、ありません」

はっきりと返事をされては、俺ももう何も言えない。

だったら、さっきまでの話は一体何だったんだと言いたいが、それを言つと話が長くなりそうなのでやめておいた。

俺が黙ると、巫女さんは俺と碧さんに向かって結果を話し始めた。

「占いの結果ですけど、こう言った言葉が出ました。『あーん』  
がぶりと食……』……キス』です。あなた方の有るべき未来は、

甘々のようです」

甘々か……。

そういや、以前そんなことを考えたっけな。

ん？

「って、2つ目は何かおかしいだろ！ がぶりって、俺喰われるの！？」

「でも、輝君っておいしそうよねえ〜」

えっ！？ 俺は、はっとしてその声の主の顔を見やった。

・・・まじっすか？

「あらあら、私は本気よお」

「・・・腹八分が一番ですよ」

冗談とも本気とも碧さんの発言は取れる。

俺は、冗談と受け取ったのだが、巫女さんはそうではなかった。

「セクシャルな意味かしら、それをモカニバリズムかしら？」

「しらじらしいですね」

どう考えても前者しか受け付けない。

でも、後者もあり得そうだから困る。

「分かっているなら、聞き返さないでくださいね。あと、あなたは誰と一緒にいても尻に敷かれます。間違っても逆らおうなんて思わないことをお勧めします。それが、あなたの生きる道です」

それは、確定事項なのか？

そう思ったが、俺の未来なんてそんなものかもしれない。  
とりあえず、俺の未来は誰かと一緒ということだけは保証されてい  
るようだ。それだけでもほっとするべきなんだ。

「誰とも一緒にならない未来もありますからご注意くださいね」  
「……」

もうやだ、この巫女さん。

「あらあら、私が輝君のこと、可愛がってあげないといけないわね  
え」

「明らかに面白がってますよね？」

俺の問いに碧さんは、ふふっと意味ありげに笑っただけだった。  
元々不思議なというか独特の雰囲気を持つ碧さんだけに、何を考  
えているのかを知るのは容易ではない。

かわいがるというのも意味が2つあるし……。

悪い方の意味を知っているとは思わないが、噛みつかれるのはその  
類に属するような気もする。

碧さんは、俺の退路を断つのがうまいから気をつけないと……。

「そうそう。明日はエビの味噌汁ですよ。茹であがって赤くなった  
エビが見えます」

帰り際に、巫女が俺達に向かってそう言ったが、もう信じる気もな

かった俺は会釈だけするとそのままそこを後にした。

そろそろ花火が始まるというので、移動している最中。  
隣に並んだ碧さんが、意味深にこう言った。

「そつだ、輝君。食べ・・・じゃなくて、キスしてもいいかしら？」  
「っ!？」

やっぱり油断のならない人だ。

## エピソード：オチはやっぱり

俺は、昨日の疲れのためなかなか起きることができずにいた。

蒲団が温かい。蒲団がいつもより温かい。

俺1人では到底為し得ぬほどに温かい。

ほかほかした布団は、程よく俺を睡眠へと誘う。

たとえば、それがいけないことであっても。

・・・でも、起きないと葵が煩いだろうから起きないとな。

朝から口やかましく怒られるのは勘弁願いたい。

俺は、とりあえず蒲団から這い出すために、努力を始める。  
まずは、蒲団から出よう。

・・・。

・・・。

しかし、俺は蒲団から這いだせなかった。  
意志に負けたとかそういうものではない。決してそういうことでは  
ない。

・・・。

・・・。

・・・もう少しだけ。

「起きろーっ、輝！ 大変だよ、輝。葵が、葵が！」

「ぐべっ!？」

が、いきなりノックもせず飛び込んで来た加奈に文字通り叩き起  
こされた。

「輝に食べさせるって張り切っているんだけど・・・って、何丸く  
なってるの？」

「・・・加奈、お前がやったんだよ」

蒲団から蹴り出され、俺は加奈を仰向けに見上げながら抗議する。

「ふーん・・・。それじゃ、早く降りてきてよね。輝が来ないと食  
べられないし」

一体、部屋に入って来た時の騒ぎ様は何だったのだと言いたくなるくらいに、ドライに言い放って加奈は、部屋から出て行った。

「……」

何か言い返されるだろうと思っていたのに、淡白な反応だけを残された俺の立場って……？

……。

……。

とりあえず、朝食に行くか。

考えることを放棄した俺は、まだ若干たるさの残る体を引きずってリビングへと向かった。

リビングに入ると、味噌の良い香りが漂っていた。こういう日本の味というものはいつまでも残すべきだと俺は思わなでもない。

「ん？ 今日の味噌汁は……」

ちょうど葵と視線が合ったので聞いてみる。

すると、葵は朝から眠たげに動きの鈍い俺に対しても、にこりと微

笑んで何だか楽しげに言った。

「はい。今日はまっかちんです」

しかし、どう見てもそれはザリガニであって……。

「まっかちは、ザリガニの別の名です。以前、ザリガニはダメだと言われたので、今日は変えてみました」

「同じだよっ！？ 見紛うことなくザリガニだよな！」

名前を変えてもザリガニに変わりはないのだ。

身だけなら分からないかもしれない。寿司ネタでもそういう偽物は出回っているわけだし。

でも、……丸ごとはいくらなんでも分かるだろ、と思う。

どんな容姿か分からないからこそ食べられるものがある。知らない方が幸せってこともあるんだ。

「輝さんは、ご存じないかもしれませんが、ザリガニはとても弱い生き物で、数匹入れたバケツを1晩放置しただけで死んでしまうのですよ。そんなもつたいな……いえ、可哀想な事をしてはいけないと思うのです」

弱い以前に、飼い方が間違っているような気もする。

「もつたいない精神は素晴らしいけど、それとこれとは別だと思っぞ。ゴミ屋敷の住人じゃあるまいし、捨てるものは捨てない」と

「まっかちにはゴミなんかじゃありません！ こんなにおいしいのに」

葵は、そう言って小さいのを1匹ぱくりと食べてみせた。とても良い笑顔だ。

ただ残念なことに彼女にとっておいしいものであっても、俺にとっては違うことだってあるのだ。

「・・・俺は食べないからな？ 絶対に食べない！」

以前にも見たことがあるが、やはりこの光景に対する拒絶感はまだ拭えない。

抵抗がなくなったら、人として大事な何かを失うような気がしたのだ。

「慣れてしまえばどうということはありませんよ？」

「それでもいらぬ。・・・うえ、泥臭い」

ザリガニだけ外に出して味噌汁を啜ったものの、やはりいつもと違いあまりおいしくはなかった。

「あーっ！？ ・・・なんてもつたないことを」

葵は俺が退けたザリガニを自分の味噌汁に入れると、俺をじいと恨めしげに一睨みしてからそれも食べ出した。

加奈と碧さんは我関せずと言わんばかりにテレビを見ながら2人で話をしているし、葵も拗ねてしまっている。

昨日は、あれほど機嫌がよかったと言っのに・・・。

女心は難しいものだと言われ朝から痛感するのだった。

後に知ったことだが、ザリガニはエビと目らしい。

本当にどうでもいいことだ。

## エピローグ：オチはやっぱり（後書き）

最後まで読んでくださった方、ありがとうございました。

この作品は、雨月先生の竜と書いてドラゴンと呼ぶ！（下にリンクあります）を許可をいただいた上で私なりに書いたものです。

小説家になろうの中で尊敬する方の作品を書くことができ、私自身非常に楽しく書くことができました。

あまり文自体が長くないのに時間がかかってしまい、読んでくださった雨月先生には大変ご迷惑をおかけしました。

最後になりますが、大したレベルにも達していない私に快く許可をいただいた雨月先生、本当にありがとうございました。

この言葉で締めさせていただきます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5963f/>

---

竜と書いてドラゴンと呼ぶ！短編

2010年10月11日12時12分発行